備える 3.11から 災前の策　第137回 東日本大震災の教訓

津波から逃れる4ヵ条

2万人近くの死者・行方不明者を出した東日本大震災の発生からもうすぐ6年。「想定外」の大津波が人と町をのみ込み、日常生活を奪った。被災地では亡くした大切な人を悼み、再び同じ悲劇を繰り返さぬよう、教訓を語り継ぐ人たちがいる。あの大災害から私たちは何を学ばなければならないのか。教訓の一部を改めてまとめた。（塚田真裕）

1 すぐに高い場所へ

4階建て 屋上で待機

宮城県南三陸町の結婚式場「高野会館」は、津波から三百二十七人の命を救った。語り部を務める南三陸ホテル観洋の伊藤文夫さん(三)は、とにかく高い場所へ避難することの重要性を力説する。

同館は海から二百㍍の位置にあり、周囲では高い四階建てが多くを占める。伊藤さんによると当時、三階では高齢者による芸能発表会が開かれていた。館内にいた従業員は「これだけ大きな揺れなら、津波が来るはず」と判断。近くに高台はあったものの、お年寄りが多いため避難は間に合わないとどまることを決めた。

来館者はパニックになり、家へ帰ろうとする人もいた。従業員が出入り口に立ちはだかり「生きたかったらここに残れ」と叫び、とどまらせた。

従業員の案内で屋上へと避難。地震から四十分後、高さ約一五㍍の津波が襲った。屋上も三十㍍浸水したが、全員生き延びた。伊藤さんは「高台へ逃げられない場合は、周囲の建物を見渡し、最も高い場所へ避難を」と訴える。

327人の命を守った高野会館＝南三陸ホテル観洋提供

2 事前の準備を

避難先 議論重ねて

宮城県南三陸町の戸倉地区には高さ二〇㍍の津波が襲った。海岸から二百㍍の戸倉小学校は、屋上から高台へのどちらに逃げるか選択を迫られただが、高台への避難で児童の命を守った。判断の背景には避難場所を巡る議論の積み重ねがあった。

当時校長だった麻生川敦さん(六)＝現同県富谷市東向陽台小校長＝は「とっさの判断ができたのはずっと考え、議論してきたから」と明かす。二年間、教職員とどちらに避難するべきかを検討してきた。

一九六〇年のチリ地震津波では、校舎の一階が水没した同校。屋上ならすぐ避難できるが、孤立する可能性がある。高台なら二次避難もできるが、四百㍍離れており、歩いて十分はかかる。東北大が宮城県沖地震で起きる津波の到達時間をシミュレーションしており、三～五分と想定されていた。結論は出ず、東日本大震災の三週間前、避難場所は一状況によって校長が判断する」とマニュアルに付け加えた。

戸倉小の児童が避難した高台＝宮城県南三陸町で

当日は海を見ながら判断した。校庭に集まっての点呼を省略し、すぐに高台へと向かった。最初に避難した場所にも水が及んだため、さらに高い神社の境内へ駆け上がり、津波から逃れた。三階建ての校舎はすべて水没した。麻生川さんは「事前の準備が、とっさの判断につながる」と語る。

3 川に警戒する

大川小 海から3.8キロ

宮城県石巻市の大川小学校では、児童と教職員計八十四人が犠牲となった。校舎は海から三・八㌔離れていたが、近くを流れる北上川をさかのぼる津波が襲った。六年生の次女みずほさんを亡くした佐藤敏郎さん(五三)は「全国どこでも同じような地形に立つ学校はある。本当に備えは大丈夫か見直してほしい」と訴える。

校舎のあった低地区は一九六〇年のチリ地震津波で被害を受けず、宮城県沖地震を想定した県の津波浸水予測でも浸水の範囲外だった。

だが、東日本大震災では幅五百㍍以上ある北上川があふれた。佐藤さんは「津波はあらゆる物を巻き込んで襲ってくる」と語る。

家や車、海岸にあった何千本もの松が新北上大橋に押し寄せ、堰のようになって、耐えられなくなった水が横方向に一気に流れ出た。陸からの津波と川からの津波が大川小辺りでぶつかり、渦を巻いたとされている。

児童らは校庭に五十分間とどまり続け、避難を始めてすぐに津波にのまれた。佐藤さんは「子どもたちはどんなに寒くて怖くて、死にたくなかっただろうと思う。無駄にしてはいけない」と悲劇を語り継ぐ。

「子どもたちの死を無駄にしてはいけない」と訴える佐藤敏郎さん＝宮城県石巻市の大川小学校で

4 想定外を想定する

行政に任せきりダメ

震災前の町で「想定外を想定して」と語りかける小野寺敬子さん＝宮城県気仙沼市で

宮城県気仙沼市の杉ノ下地区は市の指定避難所の高台が津波にのまれ、住民の三割が犠牲になった。杉ノ下遺族会の小野寺敬子さん(五)は「行政に任せきりではだめ。想定外も想定して」と訴える。

杉ノ下地区は海に近く、防災意識の高い地域として知られていた。年二回津波を想定した避難訓練をしており、避難場所も行政と話し合って決めた。津波の想定高は八㍍。避難所に決めた高台は十二㍍。だが、津波は高台を二～三㍍超える高さで襲ってきた。当時、六十人が避難しており、生き残ったのはわずか六人だった。

その高台には、住民の無念の思いを記した慰霊碑が立っている。「ここに居れば大丈夫だ」しかし、無情にも第一波で下手から家や車が押し寄せ、そして、第二波、第三波が…九十三名の尊い命とすべての財産が海へと散った。

小野寺さんは慰霊碑に教訓を刻んだ。「この悲劇を繰り返すな 大地が揺れたらすぐ逃げろ より遠くへ より高台へ」

歴史に学ぶ ⑥

勤務中の犠牲防げ

宮城県女川町にあった、七十七銀行女川支店の跡地を見下ろすようにモニュメントは立っている。供え物が途切れることはない。

海から百㍍の同支店では、支店長の指示で行員十三人が高さ十㍍の屋上に避難した。だが、はるかに高い津波によって支店長を含む十二人が犠牲になった。指定避難所の堀切山までは二百六十㍍。走れば一分の距離だった。遺族は「業務管理下であった悲劇を繰り返すな」と企業防災のあり方を訴え、その象徴として二五年三月にモニュメントを建てた。男女の行員の姿が彫られ、穏やかな表情でほほ笑む。碑文には「命を守るには高台へ行かねばならぬ」「東日本大震災を教訓に職場の命守れ」と刻まれた。

遺族は毎週末、モニュメントの前であの日の出来事を語り「一緒に企業防災を考えてみませんか」と呼び掛けている。長男の田村健太さん(当時(二)＝全失った父の孝行さん(当)と母の弘美さん(当四)は「助かるべき命を失うことが、二度とあってはならない」と語る。

七十七銀行女川支店の被災者を悼むモニュメント＝宮城県女川町で

自分の地域に当てはめて

東大総合防災情報研究センター長 田中淳教授

教訓を生かすには、具体的に住んでいる市町村はどうかと、自分のこととして引きつけていくことが必要だ。例えば愛知県では人口が多く、大規模な火災が心配される。三陸では鉄道が止まることもあった。こうした論点ごとに整理して検証していくことで、何が課題でそれをどうやって克服できるかが見えてくる。

また、東日本大震災では隣近所に声を掛けて逃げたり、民家が被災者を受け入れたりと地域の結び付きが力を発揮した。地域づくりの大切さも教訓として残したい。

東日本大震災では家屋の倒壊は少なかった。だが、南海トラフ巨大地震が起これば圧倒的に家屋の倒壊が多くなると想定されている。東日本大震災では目立たない形になっていた家屋の倒壊対策として、耐震化や家具固定を進めていかなければならない。

「備える」は毎月第1月曜日に掲載予定。次回は4月3日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています